中学生の居場所づくり活動「MONDAY ROOM 北 遊魂」

内山　　悠

１．問題意識

昨今、中学生を取り巻く状況は多様化している。部活動や塾で日々、忙しく過ごす人がいる一方で、毎日行き場もなくウロウロとしている人もいる。学校では、習熟度の差が開くばかりである。発達段階においても、中学生は思春期にあたり、仲間関係、家族関係、その他さまざまな人間関係に不安を抱え、自分自身のありようについて悩む時期である。

一方で、地域社会では、各世代のネットワークは多少あるにしても、他世代との交流はないに等しい。その上、中学生になると子ども会などの地域組織からは卒業し、地域社会と関わる機会は激減する。

こういった中学生の居場所がない状況を打開し、さらに中学生の地域参画を促そうと筆者は居住する大阪府羽曳野市峰塚中学校区において中学生の居場所づくりの活動を始めた。

２．活動の準備

まず、活動を始めるにあたり、実施時間や場所などの選定を行った。

本活動を展開する峰塚中学校区は４つの小学校区からなっており、そのうちの羽曳が丘小学校区の生徒の大多数と西浦小学校区の一部の生徒の通学路にある羽曳が丘第一集会所を使うことにした。

構想段階から、集会所を開放して活動を行うのは、週に１度と考えていた。これは、毎日開けるほどスタッフの人材が確保できる見込みはなく、月に１度では非日常化してしまうため、日常性を担保できるところで週に１度と考えたからである。

そして、峰塚中学校では月曜日は５時限目までの 14 時 20 分で授業が終了し、クラブ活動もなく一斉下校となることがある。そのため、月曜日の放課後にあたる 15 時から、クラブ活動が終わって帰宅する時間（最終下校時刻は 18 時）を考慮して 19 時まで開放することにした。通常、このような中学生の居場所づくりをする際は、ある程度内容が決まっていたり、イベントのようにプログラムが組んであったりするのが一般的である。しかし、中学生の参画意識の向上を目指した活動であることから、中学生の主体性を尊重し、あえて内容は決めず、プログラムも組まないことにした。筆者は、時間と場所を決め、最低限の文房具のみ用意した。

広報活動については、時間と場所、趣旨を記した A4 サイズのチラシをつくり、30 枚印刷した。それを知り合いの中学生や、中学生の子どもを持つ親、地域で活動している大人に手渡しした。他に、活動の予定や当日の様子などをブログや Facebook、Twitter でも紹介し、ブログは７月23日までにのべ297回のアクセスがあった。こういった web 媒体は直接の参加には結びつきにくいものの、間接的に広く活動を伝えられる利点がある。

3. 活動の実践

実際に活動を始めてみると、筆者が直接声をかけた中学３年生の男子２人（ここではＡくんとＢくんとする）の状態が１ヶ月ほど続いた（表１　活動の概要）。その中で、彼ら２人は場を

自分たちのものにすべく、名前をつけ、活動内容を模索していった。月曜日に開いていること、小学校区の北の端にあること、遊び魂を発揮できることの３つから、「MONDAY ROOM 北 遊魂―マンデールーム キタ ユウコン―」と名付けた。

彼ら２人がまず始めたことは、あるものを何でも使ってみることだった。ホワイトボードを使って、テレビ番組をまねた漢字や計算のクイズを出してみたり、身体一つでできる、鬼ごっこやプロレスごっこなどを始めたりした。机の端からコインをはじき、落とすことなくいかに遠くに飛ばすことができるかを競う「チキンレース」という遊びも彼らのお気に入りである。しかし、それだけでは飽きたらず、次第にトランプやカードゲーム、ポータブルゲーム機を持ち込むようになり、あるものと持って来たものの両方を使うようになってきた。

そうこうしているうちに、２人だけでは展開が浅いことに気づいた彼らは、自分の知り合いを誘うようになった。会場は集会所の１階を使用しているのだが、ドアではなく、大きな窓を出入口として利用している（図１　会場及びその周辺の見取り図（筆者作成））。この窓は、徒歩で通行できる抜け道に接しているため、近隣の住民や学校帰りの中学生がしばしば前を通る。彼らが前を通ったクラスメイトに声をかけることも何度かあった。そして、その甲斐があり、６月に入ってからＡくんのクラスメイトＣさん、Ｄくん、Ｅくんが参加するようになり、７月 23 日にはＢくんの彼女であるＦさんも参加した。

話は前後するが、７月 16 日は祝日であったため、13 時 30 分から 90 分間、筆者と同じゼミに所属する飯塚宜子氏を招いて、モンゴル遊牧民のくらしをなぞるワークショップを開催した。飯塚氏は、プロジェクターを使ってモンゴル遊牧民の写真を映しながらワークショップを進めたのだが、ＡくんとＢくんはこのプロジェクターに反応した。

これってさぁ、DVD 持ってきたら映画見れる？

実際にその場で取りに帰ることはしなかったが、ワークショップ終了後、Ａくんは筆者の PC でも DVD を再生できるのか確認した。筆者の PC は外部接続端末を取り付ける必要があるが、DVD を再生することは可能であると伝えた。すると、ＢくんがCD を聞くことはできるのか聞いた。可能であることを伝えると、カラオケ大会がしたいと言い出した。その意見にＡくんも賛同し、次回、筆者は PC と外部接続端末、ＡくんとＢくんは歌いたい曲の CD を持って来ることで同意した。これまでは、その日にそれぞれがしたいことをしていたが、「来週何をするか」という見通しを持つようになった。

そうして迎えた７月 23 日は、よく晴れた暑い日だった。この日から中学生は夏休みに入っていたこともあり、13 時からにしようと話していた。筆者が 12 時 50 分に到着すると、もう既に３人来ていた。ＡくんとＢくんと初めて見るＦさんである。自分たちでいつものように机を並べて、調理室からコップを出し、コーラを飲んでくつろいでいる。「早いやん。」と声を掛けると、12 時ごろから来ていたそうだ。

「ちゃんとパソコン持って来たー？」とＡくんが尋ねる。よほど楽しみにしていたらしい。「そっちこそ、ちゃんと CD 持って来たん？私 CD は１枚も持ってきてないで。」と返す。その間一言も発しないＦさんを少し気にしていると、Ｂくんが思い出したように「あ、こいつオレの彼女。」と紹介する。塾に行くそうで、PC を起動させている間に帰ってしまった。

Ａくんはもう待ちきれないという表情で、ＢくんがそんなＡくんを横目で見ている。Ａくんの持って来た CD の曲が始まった。スタートにふさわしい、わくわくする曲だ。感情たっぷりに、楽しそうに歌う。歌い終わるとＢくんと筆者で拍手喝采。次はＢくんの番だ。Ｂくんは自分で持って来たポータブルオーディオプレイヤーと付属のスピーカーで再生する。今度はムーディーな女性歌手の曲だ。サビの音程が高すぎて、途中で停止する。別の曲を再生し、歌い出した。

そういえば、と思い出し、筆者はいつも貼っているチラシを窓の外に貼りに行く。そして、この日は筆者もスタッフをしている「はびきのプレーパーク」のメンバーがイベントの横断幕を描くために来る予定だったため、その作業のための机を出して並べた。

Ｂくんの曲が終わり、次はまたＡくんの番だ。Ｂくんがやってきて、筆者が絵の具などの準備

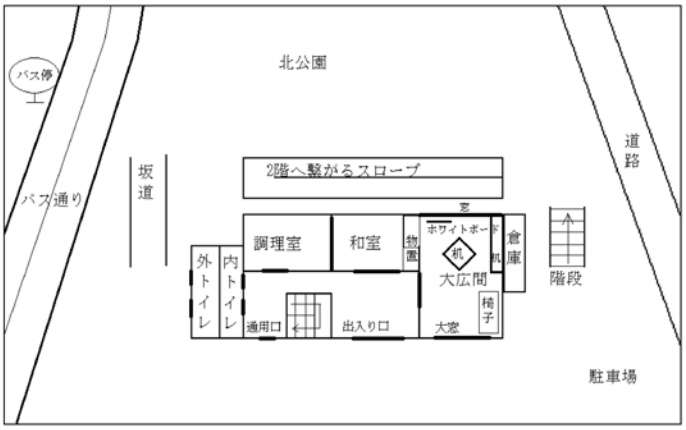

図１　会場及びその周辺の見取り図（筆者作成）

表１　活動の概要

日にち	時間	場所※	参加した中学生（入って来た人のみカウント）	参加した大人（筆者を除く）	活動の変化
4/30（祝）	11:00 ～ 16:00	集会所	１人　A	４人　H, I, J, K	出来ることを模索する
5/ 7	15:00 ～ 19:00		２人　A, B	１人　J	
5/14			２人　A, B	２人　J, H	
5/21			２人　A, B	１人　K	
5/28			２人　A, B	１人　K	
6/ 4			１人　A	０人	
6/11			２人　A, C	１人　K	
6/18		北公園	３人　A, C, D	０人	仲間を広げる
6/25		集会所	１人　A	０人	
7/ 2		MOMOプラザ	１人　A	１人　L	
7/ 9		集会所	２人　A, E	０人	
7/16（祝）	13:00 ～ 19:00		３人　A, B, C	２人　H, I	計画を立てて実行する
7/23			６人　A, B, C, D, F, G（他に、幼児・小学生も４人参加）	３人　K, L, M	

※集会所は羽曳が丘第一集会所、北公園は羽曳が丘北公園（集会所と隣接）、MOMO プラザは羽曳が丘コミュニティセンター MOMO プラザ（図書館が入っており、試験期間は中高生が勉強する姿が見られる）をそれぞれ指す。集会所は葬儀優先なので、予約していても使えないことがある。

をするのを見つめている。Ａくんも歌いながら歩き回り、落ちていたピンポン球を拾う。曲が終わるとＡくんは文房具の箱の中から小さな缶を取りだし、それをラケット代わりにピンポン球を打った。

Ｂくんが曲を再生し、歌い始める。Ａくんは机を壁につけ、机を卓球台に、壁を相手に打ち始めた。あまりに打ちにくそうだったため、筆者がパレット代わりに持って来ていた牛乳パックを開いたものを渡す。Ａくんは受け取り、それを半分に折って打ち始めた。Ｂくんは曲を止め、無言のまま私に手を出す。私はもう１つ牛乳パックを取り出し、Ｂくんに渡した。壁が相手だった卓球が、ＡくんとＢくんのラリーになった。

こうして、「カラオケ大会」と称した彼らの催しは終わったが、その後に来たＣさんやＤくんにも CD を持って来るように勧め、またやろうと話し合う姿が見られた。

4. まとめ

このように、活動を始めてからわずか３ヶ月の間に場は次々と移ろい、姿を変えてきた。現在のところ、地域社会との関わりがあまりないという中学生の現状を打開できてはおらず、中学生の地域参画とは遠い状態にある。しかし、確実に場は変化しており、わずかながら参画への兆しが感じられるようになってきている。

筆者は、今後も彼らのつくる場を見守り、参画を促す役割を担っていきたい。

参考ウェブサイト

・羽曳野市立峰塚中学校 HP　http://www.city.habikino.osaka.jp/jhs/minecyu/　（2012 年７月 27 日閲覧）